樋口一葉「うらむらさき」・「われから」
―「カネ」と「モノ」と「女の欲望」―

塚本章子

はじめに

最晩年の一葉が、「うらむらさき」（『新文壇』明二九・二）を中断し、「われから」（『文芸倶楽部』明二九・五）を書いたことは、一つの謎といってよい。なぜなら、女性の不義を描いたという点からいえば、「うらむらさき」のお律の方が、夫を裏切っても自分の恋を貫く女性として一途であり、「われから」の、物への欲望に目がくらんだような美尾の不義や、あったかなかったのかさえはっきりとは描かれぬお町の不義よりも、分かりやすいし、共感もしやすいからである。なぜ、一葉は、「うらむらさき」を中断して、「われから」を書かねばならなかったのだろうか。

また、「われから」は、美尾の物語と、お町の物語が、どこで繋がりを持っているかということが、大きな問題となってきた。母に続き、娘も不義を犯すことに、「遺伝的な性格」[1]や、「血の宿命」[2]を見るという論。あるいは、「旧道徳に対決しようとした悲壮さ」[3]や、「抵抗」[4]を見る論。二組の夫婦の破綻へのプロセスを見る論[5]。「夫との関係の中で身悶えしている」母娘の二つの物語と見る論[6]。また、二つの物語をつなぐ存在として、与四郎に注目した論[7]などをあげることができる。

そして、「われから」についてもう一つ疑問に思われるのは、主人公であるお町の崩れていくような心の弱さである。「にごりえ」（『文芸倶楽部』明二八・九）のお力は、「持たれたら嬉しいか添うたら本望かそれが私は分かりませぬ」という。この世の底辺で酌婦という境遇を引き受け、深い苦悩を抱きながら、お力はそれでも一人で生きようとした。お力は、一葉が描き出した女性像の一つの極北であろう。このお力を描き出した一葉が、死を予感しながら、「うらむらさき」を中断して、最後に描いた主人公が、なぜお町だったのか。

「うらむらさき」から「われから」へという展開のなかに、そして「われから」のお町の物語と美尾の物語の二重構造のなかに、描かれようとしていたのは、どのような問題なのか。そしてお町という人物が最後に描かれねばならなかったのはなぜなのか。

「うらむらさき」に描かれているのは、藪禎子氏が言うように、「女の情念の解放への夢そのもの」[8]と、手放しで言えるものなのだろうか。また氏が言うように、「われから」の美尾の不義は「一葉が、自

己の内なる夢を美尾において実現している[9]」と、肯定することができるのだろうか。[10] 女性のなかにある打算や欲望、それをもたらしていく男性や世間のまなざしという視点を抜きにしては、この二つの小説はとらえきれないのではないか。

「うらむらさき」から「われから」へ。そこには、女性のなかにある「結婚」や「装い」の欲望を、男性や世間が女性を見つめるまなざしと、資本主義の進展とともに新たな「神」として君臨していく「カネ」と「モノ」の支配という観点からとらえようする、一葉の冷徹な観察と批評があるのではないだろうか。

そしてこのことは、さかのぼって「十三夜」（『文芸倶楽部』明二八・一二）にも見ることができるのであり、作家としての後半生に、一葉が人妻を描き続けた理由が一つ見えてくるであろう。そこには、女性と女性の格差の問題をとらえながら、共感の地平を探り続けた試みがあったのではないだろうか。

まず「うらむらさき」について論じた後、「われから」について考察していきたい。

一

お律の夫東二郎は、「毒の無い、物うたがひと言ふては露ほどもお持ちならぬ心のうつくしい人」というお律の言葉に従って、お律を愛する善良な夫として、これまで理解されてきた。[11]

だが、「車を言ふてやらぬか、何うで歩いては行かれまいにと、甘たるき言葉」という箇所の、「甘たるき」という言葉に、私はある引っ掛かりを覚える。彼は妻に何を求めていたのかということを、考えさせられてしまうのである。東二郎にとってお律は、自分の力では「歩けぬ」もの、愛玩すべき、いたいけなものでなければならなかったのである。

東二郎は、「有あまる身代を蔵の中に寝かして」、「名ばかりに」、「西洋小間物の店」を開いている。働く必要のない、「当世の算用知らぬ人よし男」である彼が開いているこの店は、半ば彼の趣味の延長であったと見ることができるだろう。

西洋小間物屋とは、当時最も「ハイカラ」な場所の一つである。『明治事物起源』（一九九七・五、筑摩書房）には、「西洋小間物の新奇纖巧なるに眩惑され、開国後年を終はるとともに、国民の需要は追々多し。」、「唐物屋の名称も、明治二十年頃より西洋小間物商と号するやうになれり。（略）その販売品目のおもなるものは、洋服附属品一切、襯衣とズボン下、靴下、猿又、手袋、釦、帽子、手巾タオル、化粧具化粧品、学校用具、ショールその他の雑品なり。」とある。店には、店主の目によって選ばれた西洋の美しい「モノ」たちが、陳列されているのである。半ば道楽のように西洋小間物屋を開く東二郎は、美しい「モノ」に対するこだわりを、強く持っている。さらに言うなら、彼の美しい女性に対するこだわりもまた、強かったと考えられる。店には、洋服、化粧品、手袋、帽子など女性の外見を美しく作り上げていく「モノ」も、東二郎に選別され、並べられていたはずだからである。

彼は、たとえ無意識ではあっても、自分のそういった目にかなう

女性を求めたのである。お律は東二郎の「恋女房」である。だがお律を見つめる東二郎の目は、美しい「モノ」や人形を愛玩する目と地続きのところにあるではないか。東二郎が、車には「直切つて」乗ろうと言うお律に、「所帯じみた事を」というのは、彼がお律に「所帯じみ」ない美しい女であり続けることを望んでいるということである。「可愛らしい声にて笑」うお律に「恐悦顔」をしている彼のまなざしが、「頭巾の上から耳を押へて急ぎ足に五六歩かけ出」し、「冷やかなる笑み」を浮かべるお律の真実の姿に鋭く届くことはない。お律は「歩けぬ」女ではない。「かけ出」していく女なのである。

しかしながら、お律は決して、被害者ではない。彼女自身が、東二郎の要望に応え、「可愛らしい声にて笑」い、「奥も表も平手に揉んで、美くしい睠に良人が立つ腹をも柔げれば、可愛らしい口元からお客様への世辞も出る。」という、「お怜悧なお内儀さま」を装っている。そして、お律の結婚は、最初から嘘で塗り固められている。「最初あの家に嫁入りする時から、東二郎どのを良人と定めて行つたのでは無い物を。形は行つても心は決して遣るまいと極めて置いたを、」というのである。そしてお律は、結婚前からの恋人である書生の吉岡と会い続ける。それは、お律に少なくとも恋心は抱いてきた東二郎の無自覚な罪よりも、罪というならば、なお罪深いものである。

お律は、なぜ東二郎との結婚を拒み、吉岡との愛を貫かなかったのか。何か、拒めない理由があったのかもしれない。例えば「わかれ道」（『国民之友』明二九・一）には、意に添わぬ結婚を強いられたとき、井戸に身を投げて死を選んだ紺屋のお絹という女性がちらりと登場する。だがお律は、少なくともそういう選択はしなかった。お律は、抵抗することなく東二郎と結婚した。そして結婚後、泣き暮らすということもしなかった。お律は、可愛い妻を演じながら、夫を欺いて吉岡と会い続けるという、したたかな選択をしたのである。吉岡のようなまだ職業の定まらぬ書生ではなく、「有あまる身代を蔵の中に寝か」す財産を持ち、人柄もいい男性を結婚相手として選ぶ打算が、お律の側にあったのかもしれない。それが、多分に家の事情によるものであったとしても、お律の心のどこかにも、全くなかったとは言い切れないだろう。結果として、お律は、結婚においては経済的安定を選択し、一方で密かに自分の「恋」をも維持しようとしているのである。

「うらむらさき」には、「結婚」という制度が、男の「モノ」を所有し愛玩するような欲望と、女の側の「カネ」への打算によってなされており、高い精神の結びつきによるものではないという現実が描かれてもいるのである。そのとき、女の「恋」は、不義としてなされるしかないのである。

後に述べるように、明治前期の、精神的に結びついた対等な男女の「恋愛」から「結婚」へという恋愛神聖論の時代は終わり、「うらむらさき」が書かれた明治二九年頃には、「結婚」もまた、「カネ」と「モノ」によって支配されていたのである。だが、お律にはまだ人を純粋に恋する心があり、不義であっても、それを貫こうとする強靭さがあった。それは、お律に、既成道徳を踏み外しても情熱的に自分を貫く新しい女性という、むしろ大きな魅力を与えているのである。

しかし、その情熱ゆえに、「うらむらさき」は中断したのではないだろうか。「カネ」と「モノ」に支配された世界には、このお律のような一途な恋の心さえないのかもしれない。それが、「うらむらさき」が中断され、「われから」が描かれていった理由なのではないか。

次に、「われから」について述べることとする。

二―一

「われから」の主人公の名前は、金村町である。「金村」という姓は、この小説において「カネ」が重要な意味を持っていることを示している。「町」はどうであろうか。この名がつけられた時のことは、次のように書かれている。「女は容貌の好きにこそ諸人の愛を受けて果報この上も無き物なれ、小野の夫れならねどお町は美くしい名と家内いさみて、」とあるように、「町」は、女の「容貌の美」を示しているのであり、このこともまた重要な問題なのである。お町の母の名も美尾であり、「美」という言葉が含まれている。「われから」にとって、「カネ」と「女の容貌」は重要な問題なのである。

お町は、今で言うところの「セレブ」な妻である。財産家の家に生まれて遺産を受け継ぎ、政治家の妻となり、夫は婿養子で、舅姑に気を遣うこともない。子どもがないことを除けば、何の不自由もない。当時の女性にとっては、一つの理想的と思えるような境遇である。

そんな日々のなかで、「習慣の恐ろしきは朝飯前の一風呂、」、「さなご入れたる糠袋にみがき上て出れば更に濃い化粧の白ぎく、是れも今更やめられぬやうな肌になりぬ。」と、お町は朝から自分の容姿を磨いているのである。

そして、「年を言はゞ二十六、遅れ咲の花も梢にしぼむ頃なれど、扮装のよきと天然の美くしきと二つ合せて五つほどは若う見られぬる徳の性、」、「金歯入れたる口元に」とある。「扮装のよき」、「金歯」とあるように、金村家の財力がお町の美を磨き上げている。

夫の誕生日には、「新調の三枚着に今歳の流行を知らしめ給ふ、」とあるように、お町は、「装い」において流行の最先端をゆくファッションリーダーである。お町の美しい容貌は、金村家の「カネ」と「モノ」と、時間的余裕によって作り上げられているのである。

お町を駆り立てているのは、「良人の君もろ共川崎の大師に参詣の道すがら停車場の群集に、あれは新橋か、何処ので有らうと咽かれて、奥様とも言はれぬる身ながら是れを浅からず嬉しうて、いつしか好みも其様に、」とあるように、世間の「群集」の視線である。その視線は、女を「容貌」や「装い」によって冷徹に値踏みする視線である。「新橋か、何処ので有らう」というささやきは、美しい女を商品として値踏みしていることを示している。そしてお町は、その視線の期待に積極的に答えようとしているのである。

この「群集」の視線が、「われから」のお町の物語と美尾の物語をつないでいる。二つの物語は、女に「容貌」や「装い」の「美」を求める「世間」と、それに答えようとする女性、というところで接合しているのである。

お町の母、美尾は、「世間」の視線によって変えられていく。

浮世に鏡といふ物のなくば、我が妍きも醜きも知らで、分に安じたる思ひ、九尺二間に楊貴妃小町を隠くして、美色の前だれ掛奥床しうて過ぎぬべし、万づに淡々しき女子心を来て揺する様な人の賞め詞に、思はず赫と上気して、

美尾は自分の身なりを気にしはじめる。「見て呉れの浮気に成」った美尾は、「襦袢の袖も欲しう、半天の襟の観光が糸ばかりに成しを淋しがる」ようになる。それは、「世間の持上げし」ことであった。

「世間」は、美尾を見つめ続ける。

見る人毎に賞めそやして、これほどの容貌を埋れ木とは可惜しいもの、出て居る人で有うなら恐らく島原切つての美人、比べ物はあるまいとて口に税が出ねば我おもしろに人の女房を評したてる白痴もあり、豆腐かふとて岡持さげて表へ出れば、通りすがりの若い輩に振かへられて、惜しい女に服粧が悪るいなど哄然と笑はれる、

「世間」は、美尾の「容貌」を値踏みし、その「装い」を笑う。その目は、女性を「容貌」で選別し、「カネ」と「モノ」とに取り憑かれて、「貧しさ」を嘲笑する視線である。美尾は深く傷つき、「不覚に袖をやしぼ」るのである。

美尾は、この「世間」の視線を自分自身のものとしてしまっている。美尾は、この視線の期待するところに積極的に答えようとするのである。

美尾の「装い」に対する執着は強い。「四丁目の薬師様にて買ふて貰ひし洋銀の指輪を大事らしう白魚のやうな、指にはめ、馬爪のさし櫛も世にある人の本甲ほどには嬉しがりし物なれども、」とある。また、与四郎と花見に出かける際にも、「随分とも有る限りの体裁をつくりて、取つて置きの一てう羅も良人は黒紬の紋つき羽織、女房は唯一筋の博多の帯しめて、昨日甘へて買ふて貰ひし黒ぬりの駒下駄、よしや畳は擬ひ南部にもせよ、比ぶる物なき時は嬉しくて立出ぬ、」とある。だがこの花見で、美尾は華族の一行に出会う。

見れば何処の華族様なるべき、（略）派手なるは曙の振袖緋無垢を重ねて、老け形なるは花の木の間の松の色、いつ見ても飽かぬは黒出たちに鼈甲のさし物、今様ならば襟の間に金ぐさりのちらつくべきなりし、車は八百膳に止まりて人は奥深く居るを

美尾は華族の一行を見て、身に付けている「モノ」の差を、言い換えれば富の差を、まざまざと見せつけられる。[12] 花見であるのに、誰も花の美など見ていない。見ているのは自分の「装い」であり、他人の「装い」との比較である。

そのときから、美尾は「はかなき夢に心の狂ひて」、「お前様いつまで是れだけの月給取つてお出遊ばすお心ぞ、」と、与四郎に強く「カネ」を求め始める。当時において、女性の「装い」は、父か夫の財力によって決定されるしかないからである。

美尾は、ついに夫と産まれたばかりのお町を捨てて出奔する。おそらく美尾は、先に出発した母のもとへ、つまり財力の有る「従三位の軍人様」のもとへ立ったのであろう。鏡台の引き出しには、二十枚の「新紙幣」が、「此金は町に乳の粉を」という手紙とともに置かれていた。美尾は、お町への母としての愛をも「カネ」に換算して出て行くのである。

与四郎は怒気心頭し、その後「カネ」の亡者となり、莫大な財産

を築く。与四郎にとって美尾は「幼馴染の妻」であり、彼は「天にも地にも二つなき物と捧げ持ちて」誠実に尽くしていた。「この与四郎にも恋は有けり、」ともあるように、与四郎と美尾には、幼馴染みの恋、例えば「たけくらべ」（『文学界』明二八・一～二九・一）の美登利と信如、「十三夜」の録之助とお関のような恋があったはずであり、「斯くて終らば千歳も美くしき夢の中に過ぬべうぞ見えし。」と語られているように、しばらくは幸せな日々があったのである。与四郎と美尾の物語は、そのような純愛が、結婚後「カネ」と「モノ」の前で敗れていくことを示しているのである。

だが、与四郎もまた、「世間」と同じように、女性に「容貌」の美を求めていたのではなかったか。子供に名を付けるとき、いくつかのくじのなかに「町」という名を入れたのは、与四郎であった。そのくじが引かれ、「女は容貌の好きにこそ諸人の愛を受けて果報この上も無き物なれ、小野の夫れならねどお町は美くしい名と」家中がいさみたつのである。そのような与四郎は、やはり美尾の「容貌」に惹かれていたのかもしれず、皮肉なことに、その「容貌」によって裏切られていったともいえるのである。

このような両親の物語の上に、お町という存在がある。「カネ」と「モノ」の支配によって、お町からは徹底的に「愛」が排除されている。母を知らず、父からは拒絶されている。そして夫恭助は、「カネ」ゆえにお町と結婚したのである。恭助はお町に対して、人形妻であること以上の期待は何もしていない。お町は、いつまでも娘のように夫と一緒に「人形」を買いに出かけ、夫の誕生日の宴会には美しく装っていればそれでよいのである。お町が浮気を責めても、恭助は「同藩の澤木が言葉のいとゑを違へぬ世は来るとも、此約束は決して違へぬ、」という、冗談混じりの返答しか与えていない。その言葉は、本気でお町に向き合っているものではない。彼には結婚以前からの女性があり、その女性との間に男の子までもうけている。彼は「カネ」ゆえにお町を騙し、「愛」は別のところで維持してきたのである。

お町に子どもがないという設定もまた、彼女が愛することや愛されることから排除されていることを物語る。お町は、「カネ」の世界によって「愛」を失った存在として、虚無のなかに生きているのである。

次に、お町の虚無感について見ていきたい。

二―二

お町という存在は、「カネ」と「モノ」に支配されていった夫婦の物語の上にある。それは、一組の夫婦というよりは、そういう価値観を持った「世間」が、そしてその価値観を内面化していった美尾と、与四郎が、生み出したものでもある。

お町は、心を病んだ女性である。「奥様はお血の故で折ふし鬱ぎ症にもお成り遊すし真実お悪い時は暗い処で泣いて居らつしやるがお持前」であり、お町は心に常に漠然とした不安を抱えている。

夫の誕生祝いの席を逃れて、お町は庭に出る。そして稲荷の社前で、「人なきに鈴の音からんとして、幣束の紙ゆらぐも淋し。町子は

俄かに物のおそろしく、」と、心の中の虚しさを真正面から感じてしまうのである。

祝宴の後、お町は「沈みに沈んで」、夫に「私は貴君に捨てられは為ぬかと存じまして、夫れで此様に淋しう思ひまする」と、訴える。「貴郎はこれより彌ます〳〵の御出世を遊して、世の中廣うなれば次第に御器量まし給ふ、」のに、自分は「有限だけの家の内に朝夕物おもひの苦も知らで、唯ぼんやりと過しまする身の、遂ひには倦かれまするやうに成りて、悲しかるべき事今おもふても愁らし、」というのである。ここには、一見何の苦労もない裕福な家の中で、何かを生産することもなく、世の中と関わることもなく、ただひたすら消費しているだけの者の不安がある。(13)

お町の心は、いっそう鬱屈していく。「我れと我が身に持て脳みて奥さま不覚に打まどひぬ、(略)淋しきまゝに琴取出し独り好みの曲を奏でるに、我れと我が調哀れに成りて、(略)涙ふりこぼして押やりぬ。」と、不安定に揺れ動くのである。

このようなお町の心に気付いたのは、書生の千葉であった。中働きの福を通して、千葉は、「それは大層な神経質で、悪るくすると取かへしの付かぬ事になる」と、お町を案じ、幼友達で「病死した可憐な子」にお町をなぞらえたという。

夫が、結婚前から別に家を持ち、男の子までもうけていたことを知った後、お町の心はますます崩れていく。「お癪の起る癖つきて、はげしき時は仰向に仆れて、今にも絶え入るばかりの苦るしみ、」、「日毎夜毎に度かさなれば、力ある手につよく押へて、一時を兎角まぎらはす」ほどのことになり、「夜といはず夜中と言はず、」千葉を呼び立てるようになるのである。お町を通して描かれているのは、「カネ」と「モノ」の世の中が生み出してしまった、心の病である。

そして千葉の介抱は、「人の目にあやしく」なり、お町と千葉はスキャンダルを好む世間の噂話に呑み込まれていく。お町と千葉の間に不義の事実があったかなかったかは、発表当時から疑問視されてきたところであるが、どちらにしても、「うらむらさき」のお律が、一途に貫いたような激しい情熱があったわけではない。

美尾の物語には、「貧しさ」を嘲笑する世間の視線が描かれていると述べたが、この「世間」は、同時に富を嫉むものでもある。「車は八百膳に止まりて人は奥深く居るを、憎くさげな評いうて見送るもあり、」とあるが、ここには、世間が、「持つ者」に対する憎悪を露骨に表すようになったことが示されている。

このような人々の視線は、お町の物語にも張り巡らされ、お町を翻弄していく。お町と千葉の不義の疑惑は、福が目当てにしていたお町の衣類をもらえなかったことが発端となり、噂として広がっていく。「かねてあら〳〵心組みの、奥様お着下しの本結城、あれこそは我が物の頼み空しう、いろ〳〵千葉の厄介に成たればとて、これを新年着に仕立てゝ遣はされし、其恨み骨髄に徹りてそれよりの見る目横にか逆にか、女髪結の留を捉らへて珍事唯今出来の顔つきに、例の口車くる〳〵とやれば」、噂は町中に広まっていったのである。ここには、持つ女への、持たざる女の嫉みがとげのように隠されている。

金村家を取り巻く世間のまなざしは、そもそも冷ややかであった。「人の生血をしぼりたる報ひか、五十にも足らで急病の脳充血、一

朝に此世の税を納めて、よしや葬儀の造花、派手に美事な造りはするとも、辻に立つて見る人に爪はぢきをされて後生いかゞと思はるゝ様成し。」とあるように、「カネ」の鬼となり、財産を築いた与四郎への憎悪があった。その名残は「落葉たくなる烟の末か、（略）裏通りの町屋の方へ朝毎に靡くを、夫れ金村の奥様がお目覚だと人わる口の一つに数へれども、」と、お町にも向けられているのである。

福の衣服に対する欲望は、悪意となってお町と千葉のスキャンダラスな噂を生み、世間の金村家に対する嫉みによって広がり、恭助の耳に届き、恭助はお町に別居を言い渡すのである。そしてお町は、養子である夫によって、そしてやがては夫が妾に生ませた男の子によって、財産も家も奪われていくのである。

「カネ」があり「モノ」に満たされていても、お町は決して幸福にはなれない。心にどうしようもない虚無感を抱え心身共に病んでいくお町を、嫉みに満ちた「世間」の視線が陥れていくのである。

「取りて見給へ、我れをば捨てゝ御覧ぜよ、一念が御座りまするとて、はたと白睨む」お町の叫びは、「カネ」の世の中の犠牲者としての叫びである。この叫びに、やはり「カネ」の世の中に苦しんだ「大つごもり」のお峯や、「にごりえ」のお力や、「たけくらべ」の美登利たちの嘆きと、共鳴しあう地点を見ることができるのではあるまいか。

三

「うらむらさき」は明治二九年二月に、「われから」は同年五月に発表されている。日清戦争後、日露戦争へと向かうこの時代は、産業が発達し、資本主義が完成していく時代であった。そして、その弊害も意識されつつあった。例えば次の資料は、欧米社会において、産業の拡大がもたらした弊害を以下のように紹介している。

既に社会生存の目的を異にす、社会の倫理も亦異ならざるべからず。階級組織の下に於ては生産者は貴族僧侶に隷属し、克く其命に服したり。然れとも自由生産の時代に於ては主従の関係を認めず、独立独行を以て其理想とせり、啻に労働者の有する生活の理想一変したるのみならず、従来治者たるの地位を占めし貴族財産家の理想も亦一変したり。彼等は曾て国民を教訓し、其平和を維持し、其幸福を増進するを以て己れの任務となせり。今や則ち然らず。其需むる所のものは一個人一家の安逸にして、或は邸宅を壮麗にし、或は遊臘、乗馬に耽けり。生活の目的に至りては毫も労働者に異なる所なし。故に富者は国民の敬愛を受くるの威信なく、貧者は之を保護誘掖するの階級なく、実に此の時代に於てはカーライルが評せし如く「現金の勘定は人間と人間とを接合せしむる惟一の連鎖なり」と言はざるへからす。

（「近世の経済と其倫理」『六合雑誌』第一八三号、明二九・二）

富める者も貧しき者も、皆「カネ」の虜となり、私腹を肥やすことだけを目的にしている。日本でも、同様のことがおきている。『六合雑誌』第一九〇号（明二九・一〇）「唯物的文明に対する精神的方面」という記事には、「今眼を転じて我邦の状態を観るに物質的文明の潮流は滔天の勢を以て全国の人心を惑溺せんとしつゝあり、」とあ

る。

また、尾崎紅葉の「金色夜叉」が発表され始めるのは、明治三〇年一月である。ここにも全てが「カネ」に支配される世の中で、「愛」が「カネ」の前で裏切られていくという、「われから」と同じ問題が描かれている。女主人公宮もまた、「われから」の美尾のように「カネ」に惹かれて貫一との「愛」を捨て、富山に嫁ぐ。

宮を富山へやると宮の父に告げられた貫一は、宮に、「富山へ嫁く、それは立派な生活をして、栄曜も出来やうし、楽も出来やう、けれども那箇の財産は決して息子の嫁の為に費さうとて作られた財産ではない、と云ふ事をお前考へなければならんよ。愛情の無い夫婦の間に、立派な生活が何だ！栄曜が何だ！」と言って、思いとどまらせようとする。だが、宮は富山に嫁ぐのである。

『六合雑誌』第二一八号（明三二・二）「時評」「時事雑感」には、次のような記事が載せられている。

利巧なる当世の女子は金銭ある所に嫁するを知れり、利欲の為には人の妾たるを以て己の権利の如くに思へり、真に相思相恋の情を以て其夫を選ぶ者能く幾人ぞ、嗚呼男女の婚姻は利益の問題となれり、金銭の問題となれり、風教の衰微一に茲に至れるか、（略）婦人が其冠たる真の愛情を失ひたる徴也、精神的恋愛の衰ふるは人心の俗化せる著しき徴也、世の女子唯金銭の為に婚し、若しくは獣欲の為に婚するか、其動産視せらるゝ固より也、（略）嗚呼当世の女子は堕落しぬ、

日清戦争前後、女性の生き方は反動の時代を迎えていた。欧化主義的女子教育は、明治二〇年代前半から後退の傾向を見せ、女大学的な意識が復活する。日清戦争後、国家主義の台頭とともにその傾向は強まり、かつて隆盛を見た男女同権論や恋愛神聖論は衰退していたのである。日清戦争以降、資本主義の進展は、拝金主義の時代を生み、女性もまた、「カネ」と「モノ」に支配されていく。「結婚」は「精神的恋愛」とは切り離され、「カネ」のためになされるものとなったのである。

この傾向は、その後の時代に、ますます顕著になってくる。少し辿る。孤剣生「乞食的結婚」（『週刊平民新聞』第三七号、明三七・七・二四）には、次のように書かれている。

晴の結婚と云ふことは富貴の人や爵禄の人に嫁することにあらずや、思ふに良縁を得んと欲する処女の理想は、氏なくして玉の輿に乗らんてふ醜業婦の理想と異ならざる也、只其文字の聊か婉曲なるに過ぎず、（略）深窓に養はれたる良家の処女と称するものが、挙つて賤妓の風采を模倣し、艶姿嬌態をつとめて羞ぢざるものは、男子の歓心を買はんとせるものにあらずや、男子の歓心を買つて良縁てふ僥倖を握らん下心にはあらずや、噴火山の如き熱情よりも、一個のダイヤモンドの襟飾こそ彼女の欲する所なれと、詩人シエレーをして婦人の軽薄を罵らしめしもの、豈独り英国のみならんや、誰か金色夜叉の女主人公、及び三万円芸妓加藤ユキは今の婦人精神の権化にあらずといふものぞ、

ここでも、「カネ」のための結婚を望み、「男子の歓心を買はんと」、「賤妓の風采を模倣」する女性が非難されている。それは、美尾やお町の姿にどこかで重なっているといえよう。そして山口孤剣は、「愛

あらば結婚す可し、愛なくんば結婚す可からず、若し婦人をして愛なくんば結婚せずてふ思想を確実ならしめんには、結婚せずとも衣食に窮せざるべく、之に職業を与ふるに若かず、」と訴えるのである。

また、同じく孤剣の「美はしき奴隷よ（三越呉服店の前に立ちて）」（『世界婦人』第二号、明四〇・一）では、三越百貨店に集まる「貴婦人」たちを、「美はしき奴隷」と呼ぶ。そして、

天鵞絨の外套に綺麗なる花柱の帽子をつゝみたるもあり、（略）古金襴の帯胸高に結べる、宝石の胸飾りよ、金剛石の指環よ、臘虎の襟巻よ何れか現世の虚栄の杯に口触れぬものかはある。（略）されど思へ、同じくかよわき花の少女の身に落ちて、粉塵雪片の如き工場の裡悪魔の呪の如き器械の下、（略）青き顔せる工女は、あはれ先きの世の罪の報ゐか、あゝ之れ全能全善なる上天の摂理なる乎。

と、美しく装う貴婦人と、その衣装を作る貧しい工女を対比させて、同じ女性の中にある、階層や、格差の問題を訴えているのである。(14)このように明治四〇年頃になると、女性の「虚栄」の問題は、より顕著になってくるのである。

「われから」に描き込まれているのは、女性のなかにある「カネ」と「モノ」への欲望である。そしてそれを生み出していくのは、「われから」に描き込まれているように、女性に「容貌」や「装い」を要求し、「モノ」として値踏みしている、「カネ」と「モノ」に毒された「世間」の目である。それはまた、「うらむらさき」の東二郎という一人の男性の妻を見る視線に重なってもいるのである。

「金色夜叉」との比較から言えば、「われから」は、女性を変貌させる「世間」のまなざしをとらえ、また、「カネ」のために「愛」を捨てた美尾の物語に終わるのではなく、「カネ」と「モノ」の「世の中」が生み出した、お町の心の虚無感を描き出したところに、一葉の特異な洞察があったといえる。

女性にとっての「カネ」と「モノ」の問題は、一葉の小説のなかにかねてから描かれている。少しさかのぼって、やはり人妻を描いた「十三夜」を見たい。

お関の父が見つめるように、お関は、「大丸髷に金輪の根を巻きて黒縮緬の羽織何の惜しげもなく、」という「奥様風」の立派な身なりになっている。お関は、すでに、高級官僚の夫原田の「カネ」で買われた「モノ」によって、その身を装い、作り上げているのである。お関の父親が、お関の装いをつくづくと眺めた後に、離縁を思いとどまらせ原田の家に帰らせるのは、このお関の装いが、彼女自身の身体の一部となってしまっているのを見たからでもあろう。

お関が、すでに「カネ」に繋がるものになっていることを象徴的に表しているのは、ラストシーンである。お関は、車引きとなった録之助との別れ際、「録さんこれは誠に失礼なれど鼻紙なりとも買つて下され」と「小菊の紙」に包んだ「カネ」を渡す。しかし録之助は、それを「貴嬢のお手より下されたのなれば、あり難く頂戴して思ひ出にしまする、」と、「思い出」として受け取っている。お関はあくまで「買う」機能を持った「カネ」として渡しているが、録之助は、「カネ」としての受け取りを優しく拒み、「思い出」として受け取っているのである。お関と録之助の見つめてきたものの違いが、ここに象徴的に描き出されているといえる。(15)

「大つごもり」のお峯、「にごりえ」のお力、「たけくらべ」の美登利といった、金銭によって抑圧される、一人で生きる女性たちを描いてきた一葉の文学は、「十三夜」以降、「この子」(『日本の家庭』明二九・一)、「うらむらさき」、「われから」と、裕福な家の人妻たちを描いている。そこには、社会の底辺で、貧しさを一人で背負って生きねばならない女性たちと、結婚して裕福に生きている女性たちとの、一つの格差の問題が横たわっている。一葉の文学は、その格差を見つめていくのである。

お力や美登利たちの苦悩と、裕福な家の人妻たち、女性と女性とが、格差を超えて共鳴していく地点があるとすれば、その一つは、一見「カネ」の世界の勝者のようでありながら、やはり「カネ」の犠牲者に他ならないお町の底知れぬ虚無感にあるのではないか。

そして、このことが、一葉が最後にお町という人物をこそ描こうとした理由なのではないだろうか。

四

明治二〇年二月一九日の一葉の日記には、萩の舎に入門して初めての発会のことが記されている。

此日発会の近付ぬとて人々さゝめき合給ひぬ　いまだ其様しらぬ身にはいとゝあやふまれて人々のの給ふをよそより聞侍れは

誰々は御振袖召給ひぬ　君は白ゑりに御すそもやうこそよからめ　いな〳〵白かさねに御うらもやうこそよかめり　色は何にかし給ふ　ふし色にくちは三つ重給はん　かうらひ色にうす紅梅の下かさねこそに合給はめなと取々いひはやし給をもいとむねふさかりて歌なと考ふる様し侍りしに

一葉は、良家の令嬢たちの衣装との違いに萎縮し、思い悩んでいる。家に帰れば、両親が、「とん子の帯一筋八丈のなへはみたる衣一重」をどこかから用意しておいてくれていたものの、出席さえためらわれる。「家は貧に身はつたなし」と嘆くが、勇気をふるって出席した発会で、一葉は最高点を獲得するのである。

この時期の日記が、「身のふる衣　まきのいち」と題されているように、この経験は一葉にとって忘れられない出来事であった。華やかな衣装に身を飾った高貴な女性たちをおさえて、粗末な身なりをした自分が一番の歌を詠んだのだという矜持が、萩の舎という華麗な世界で、一葉が自分の存在意義を確認し、生き抜いていくことを可能にさせる原点の経験となったのである。

このような体験を日記に記し、その後零落し、一家を背負い、衣類どころか食べ物にさえ事欠いていく一葉が、萩の舎の女性たちを見つめる視線には鋭いものがあったはずである。そして、美しく装い嫁いでいく女性たちの中で、女性と女性の間にある格差を感じさせられたであろう。一葉には、「書く」ことしかなかったのであり、「書く」ことによる逆転を願う気持ちもあったはずである。そう考えれば、右の日記は一葉の一生を象徴しているともいえるのである。

また「われから」とほぼ同時期に書かれた『通俗書簡文』(明二九・五、博文館)には、「友の驕奢をいさむる文」という項がある。(16) ここには、「今日此頃朝夕の御振舞何ごとに候ぞや必竟はお前様まだ世

の事を何も御存じなく人の賞むるは宜き事と思し召蔭にてのそしりに御心づかれぬよりの過ち御姿は派手を専らにと遊ばされ今更の御島田髷を人は三十振袖など申候ぞかし」という、華美な装いにはしる友をいさめる文章がある。これは、「われから」のお町を彷彿とさせるものであり、一葉の「装い」に対する意識を表している。

女の装いとは何か。結婚とは何か。「十三夜」以降、人妻を登場させ、「うらむらさき」、「われから」へと展開していく中で、女性を支配している「カネ」と「モノ」の問題が浮上してきたのである。

後に、与謝野晶子は、「女は掠奪者」（「冷たい夕飯」所収、初出は大六・一二）という詩を発表している。

大百貨店の売り出しは／どの女の心をも誘惑る、／祭よりも祝よりも誘惑る。（略）凡そ何処にあらう、三越と白木屋の売出しと聞いて、／胸を跳らさない女が、／俄かに誇大妄想家とならない女が。……／その刹那、女は皆、／（たとへ半反のモスリンを買ふため、／躊躇して、見切場に／半日を費す身分の女とても、）／その気分は貴女である。（略）けれども、近頃、／わたしに大きな不安と／深い恐怖とが感ぜられる。／私の興奮は直ぐに覚め、／わたしの狂熱は直ぐに冷えて行く。（略）大百貨店の閾を跨ぐ女に／掠奪者でない女があらうか。／掠奪者、この名は怖ろしい、／しかし、この名に値する生活を／実行して愧ぢぬ者は、／ああ、世界無数の女ではないか。／（その女の一人にわたしがゐる。）／女は父の、兄の、弟の、／良人の、あらゆる男子の、／知識と情熱と血と汗とを集めた／労働の結果である財力を奪つて／我物の如くに振舞つてゐる。／一掛の廉半襟を買ふ金とても／女自身の正当な所有では無い。／女が呉服屋へ、化粧品屋へ、／貴金属商へ支払ふ／あの莫大な額の金は／すべて男子から搾取するのである。（略）大百貨店の売出しに／お前は特権ある者の如く、／その矮い、蒼白なからだを、／最上最貴の／有勲者として飾らうとする。／ああ、男の法外な寛容、／ああ、女の法外な僭越。

晶子の詩もまた女が装うことを見つめている。それは、一葉が描いた世界の延長上にあって、やはり、女性のなかにある「カネ」と「モノ」への欲望を問いかけているのである。

おわりに

「うらむらさき」には、お律の不義という問題の背後に、お律と東二郎との結婚という問題が隠されている。そこからは、美しい人形のように妻を見ている東二郎のまなざしと共に、お律の側の欲望も、浮かび上がってくるのである。

「うらむらさき」を中断して書かれた「われから」には、女性に「容貌の美」を求める「世間」のまなざしと、それによって煽られていく「女の欲望」の問題が、構造的に捉えられている。

そして、こういった問題から、お町という、心を病み、不義へと陥れられていく一人の女性が生み出されているのである。お町をむしばむ心の病は、あたかも、一葉によって明治という時代にいち早く描かれた、「カネ」と「モノ」に支配された現代社会に生きる人間

が抱える心の病のようにも思われてくるのである。

西欧型女子教育が衰退し、恋愛神聖論が影を潜め、日清戦争以降拝金主義が横行するなかで、女性もまた「カネ」と「モノ」に支配されていく。「カネ」のために結婚する女性が増加し、「虚栄」のために装うようになる。「われから」が発表された後、明治三十年代に書かれる「金色夜叉」や山口孤剣の批評、あるいは大正六年に書かれた与謝野晶子の「女は掠奪者」という詩を見るとき、「カネ」と「モノ」に惹かれる「女性の欲望」は、一つの大きな問題であるといえる。「われから」は、その問題をいち早く捉えているのである。

それはまた、一葉自身が、萩の舎という上流階級の女性たちと接しながら経験していった、女性と女性の格差の問題でもあっただろう。その格差を超えて共鳴する地点、それは「カネ」の世の勝者に見える者もまた、犠牲者に他ならないという、お町の姿にある。

「カネ」と「モノ」によって支配される世の中を構造的に描いた「われから」は、一葉によって最後にもう一度書かれた「大つごもり」だったのである。

注（1）湯地孝『樋口一葉論』（大一五・一〇、至文堂）

（2）坂本政親「『われから』」（『国文学解釈と教材の研究』第二巻一一号一九五七・一一）

（3）塩田良平『樋口一葉研究増補改訂版』（一九六八・一一、中央公論社）

（4）村松定孝『評伝樋口一葉』（一九六七・一二、実業之日本社）

（5）戸松泉「『われから』試論―〈小説〉的世界の顕現―」（『国文学解釈と鑑賞』第六〇巻六号一九九五・六）

（6）重松恵子「樋口一葉『われから』論―母娘の物語が指向するもの―」（『近代文学論集』第一八号一九九二・一一）

（7）山田有策「『われから』―与四郎の復讐―」（『国文学解釈と鑑賞』第六〇巻六号一九九五・六）

（8）藪禎子「『うらむらさき』―作品鑑賞―」（『女性文学』一九八七・四、桜楓社）

（9）藪禎子「『われから』論」（『透谷・藤村・一葉』一九九一・七、明治書院）

（10）大井田義彰氏は、「罪は我が心より…―『われから』試論―」（『媒』第五号一九八八・一二）で、「『われから』に関する限り、一葉はけっして女たちの『声』に共感などしていない。」と述べている。だが「自己抑制を怠り、その奥深くに潜んでいるさまざまな形の欲望に身をまかせた人間を待つのは、つまるところ破滅でしかない。（略）一葉が『われから』の読者に伝えようとしていたのは、（略）世界に対するそのような醒めた認識」であるとする氏の説には、本稿で論じるように異論がある。

（11）河村清一郎氏は、「一葉における抒情の構造―『うらむらさき』をめぐって―」（『明治大学教養論集』第三三号一九六六・一）で、「良人の東二郎が、あまりにも善人であり、寛大であって、」と述べる。藤井淑禎氏も「『うらむらさき』」（『国文学解釈と鑑賞』第五一巻三号一九八六・三）で、「夫の側には何らの原因もあるわけではなく、」と述べている。藪禎子氏も、「『うらむらさき』―作品鑑賞―」（前出）で、「『心のうつくしい人』とくり返し強調されるような人柄」と述べる。長谷川啓氏も「恋の狂気が意味するもの―『裏紫』を読む」（新・フェミニズム批評の会編『樋口一葉を読みなおす』一九九四・六、學藝書林）で「善良な好人物の夫」と述べている。

（12）関礼子氏は、「物語としての『われから』」（『立教大学日本文学』第五七号一九八六・一二）で、「『惜しい女に服装が悪るい』。不遠慮なこれらの言葉は年若い美尾の心を揺さぶる。若く美しい女とは交換価値を身に備えている者の謂である。世間は十分交換価値をもった女が、安価な『洋銀の指輪』をはめ（略）安んじていることを黙って見逃がすことができない。（略）偶然目にした華美を尽した『華族様』の一行の姿は美尾に、擬ひモノ／本モノの差異を発見させ、

自らがそのような『本モノ』を身につけたいという『模倣への欲望』を起こさせるようになる。モノが行き渡り、それに応じて商品の『差異化』が進んでいる社会にあっては女性は自らの価値が商品と同じように『差異化』されていることに気づかざるをえない。」と述べている。

(13) 趙恵淑氏は、『樋口一葉作品研究』(二〇〇七・二、専修大学出版局)で、「夫を取り囲む『限りも知れず広き世』と自分を取り囲む『有限だけの家の内』という環境の差に目を向けた町子は、『御出世』をすることによってますます広くなる『世の中』で『次第に御器量まし』ていく夫と『朝夕物おもひの苦も知らで、唯ぼんやりと過』す自分、という自己発展における速度差に気づいたのである。」と述べている。

(14) 瀬崎圭二氏は、『流行と虚栄の生成』(二〇〇八・三、世界思想社)で、孤剣の「乞食的結婚」、「美はしき奴隷よ」等を挙げ、「これら社会主義者たちの言説には、女性の〈虚栄〉の結婚や、消費を支えているシステムの内部にまで分け入っていく傾向が見られる」と述べており、示唆を受けた。

(15) お関が録之助に金銭を渡すことについては、すでに批判的な指摘がされている。菅聡子氏は、「『十三夜』—心の闇—」(『国文学解釈と鑑賞』第六〇巻六号一九九五・六)で、「お関が紙幣を『小菊の紙にしほらしく』包んで録之助に与えることに何の躊躇も見せぬ」と述べる。太田路枝氏も、「『十三夜』試論」(『甲南大学紀要文学編』第一〇三号一九九七・三)「奥様から車夫への施しの金銭にほかならない。」、「お関がしたことは奏任官の妻という現在の自己の地位に著しく依存した行為」であると述べる。笹尾佳代氏も、「『十三夜』論—コミュニケーションの不可能性—」(『論集樋口一葉Ⅳ』二〇〇六・一一、おうふう)で、「贈与された『紙幣』は、現在のお関が『原田の妻』であることを明示する」と述べている。

(16) 大井田義彰氏は、「罪は我が心より…—『われから』試論—」(『媒』第五号一九八八・一二)「一葉は『われから』とほぼ同時期に執筆された『通俗書簡文』(明二九・五、博文館)の中で、「女の驕奢をいさむる文」という項目を設け、両親が没した後、芝居に花見にと驕った生活を続けるお町とよく似た女性に、彼女の友人が(略)注意を促す内容の手紙を創作している」と指摘している。

(つかもと　あきこ、甲南大学准教授)